

会 議 録

会議の名称	令和4年度第3回富士見市社会教育委員会議
開催日時	令和4年8月29日（月）午後7時00分～8時00分
開催場所	中央図書館 視聴覚ホール
出席者	古澤立巳議長、佐々木眞理子副議長、荒川照子委員、京谷恵子委員、渡邊知広委員、吉田和江委員、内海幸一郎委員、富士伸委員、事務局
欠席者	吉田徹子委員、蘇武伸吾委員
公開・非公開	公開（傍聴人 0人）
会議次第	1 議長あいさつ 2 協議事項 3 その他
会議資料	・ 定期刊行物 ・ 資料1 「提言書（案）概要」 ・ 資料2 「提言書（案）」 ・ 資料3 「つながり・生涯学習・社会教育について（抜粋）」
会議録確認	古澤立巳議長

会議内容

1 議長あいさつ

【議長】 今回も各委員の立場から、ご意見や感想をいただければ。また前回の会議開催から3ヶ月近く経っている。前回会議の会議録も本日配布されているので、確認していただきたい。

2 協議事項

【議長】 では、まず事務局から資料の説明を。

【事務局】 資料に基づき説明。前回の会議で、問題点を整理したほうがよいとご指摘いただいた。この点について修正できているか、まずはご確認いただきたい。また議長より、なぜつながりが重要なのか、その理由を丁寧に考えていきたいとご指摘があった。つながりの必要性について、各委員の経験等から得た知見を伺いたい。

【議長】 前回の議事録に沿って、各委員から意見を伺っていく。まずは問題点の整理について。

【委員】 問題点を「担い手の固定化・高齢化」に置くのか、「つながりの希薄化」に置くのか、どちらに置くかはこの会議で決められればよいと考えていた。「つながりの希薄化」に置くということであれば、これで問題ないと考える。

【事務局】 問題点をどちらに置くかという事については、これまでの会議での各委員のご発言から、「つながりの希薄化」が適していると考えた。前回の会議でも委員からご指摘があったが、特定の世代しか社会教育活動に参加していないという現状があり、それは世代間のつながりが築けていないから。特定の世代だけで活動するだけでは得られない、様々な世代が交流しながら活動することで得られる学びや楽しさがある。世代をこえたつながりを形成する場がない、ということが問題だと整理した。

【委員】 つながりを築くことができれば、担い手は自ずと生まれてくるものだと思う。担い手について問題にすると、とりあえず誰か連れてこよう、という話になりかねない。そういうやり方は必ずしも正しいとは思えない。活動に携わる楽しさを、世代をこえて共有することが重要と考える。

【事務局】 他の委員からも趣旨を同じくする意見があった。担い手確保を第一に動くとは敬遠されてしまう。そうではなくて、できる時に関わってもらおうこと。そして、やってみたら楽しかったから、もう一度参加してみようか、と思ってもらえるような仕組みづくりが重要という意見があった。それらの意見を踏まえて、今回このようにまとめた。

【委員】 担い手について問題とする場合に懸念していたのが、「高齢化」というワード。過剰に反応される方がいたらいけないなと考えていた。今現在担い手として一所懸命に活動されている、ある程度ご高齢の方達が、不快に思われないか心配だった。

【委員】 確かに、実際にそういった話を聞いたことがある。若い人に参加してもらおう、という話を聞いた方が、私たちはもう活動しなくていいのかな、

と感じたとのこと。そういうことではなくて、上の世代も下の世代も、様々な世代の方の活動場所がある、という事が重要だと思う。

【委員】 上の世代が活動しているところに、下の世代は入りにくいという意見がある。そこをどうやって解決するか、いかに世代をこえて下の世代にも入ってきてもらうか、工夫が必要。興味がない人をどう巻き込んでいくか、色々考えて日々活動している。

【議長】 具体的な事例があればお伺いしたい。

【委員】 情報の共有をするため、みんなで集まることがしばしばある。集まる前に、しっかりと話を聞き取ることが重要。また楽しいと思ってもらえるよう、方法を工夫している。しかし昨今の新型コロナウイルスの影響により個人で活動するという風潮が強くなっており、今後の課題である。しかしきっかけさえあれば続いていく。やはり、いかに巻き込んでいくか、どのように周知していくか、という点が大事ではないかと考えている。

【委員】 6月の下旬頃、地域で環境浄化活動を3年ぶりに行った。約800人、約2500世帯の参加があり、下は未就学児から上は80代、90代の方までいた。私も参加したが、暑い時期で、なぜみんなここまで一所懸命に活動できるのかと不思議だった。しかし終わってみると達成感が大きかった。子どもたちの使う通学路もきれいにするのができた。暑いことや湿度が高いことなど忘れて、夢中になってゴミ拾いを行った。子どもが小さい内からこのような活動を見せることができると、その子どもが大きくなったとき、自然に活動がつながっていくのだと思った。みんなで参加することは大事で、つながりとはこういうことかと実感した。

【委員】 私は日光東照宮の近くで生まれ育ったが、年に一回栗石返しという、石の掃除をする行事があった。各町会で受け持つ範囲が決められており、石の下にたまっている杉の葉などを掃除していた。そこには世代関係なく、高齢者の方もいたし、小さい子どももいた。栗石返しの日は、普段拝観料を払わないと入れないところにも入ることができ、子ども達はそれを楽しみにしていた。30代、40代の子育て世代も参加していた。

【議長】 子どもの時に経験したことが、親になった時に自然とつながっていたのではないか。子どもの時に当たり前のように参加している親を見て、自分も親になった時に、子どもを連れて参加するのは自然なことだったのだと思う。

【委員】 学校教育と家庭教育、そして社会教育が連携して環境を作れているか、そこが重要だと考えている。委員から様々な観点からお話があったが、循環の中で、子ども自身が楽しむことはもちろん、「大人って楽しそうだな」と感じてもらうこと、親子で参加して、家庭で「今日楽しかったね」と共有してもらうこと、そういったことの積み重ねの中で、自分も将来そういう大人になりたいという思いが芽生え、それがまた次の世代に繋がってサイクルが生まれていく。それが大事なのではないかと思う。私は地域のネットワークの中心に学校がいなければいけないのだろうなと考えている。地域の拠り所としての学校は、大きな意義を持っている。地域で何かあった時、例えば自然災害、地域のお祭り、地域の運動会な

ど、学校に足を運ぶ。地域の中でみんなが集まれる場所として、学校の存在意義は大きい。また、学校を会場として、なにかをやるということに、保護者の方は安心感を持つ。公民館の一室でなにか開催するのと、学校の教室でなにかを開催するのでは、保護者の方の中で、受けとめる印象が違うという方もいるのではないだろうか。コミュニティ・スクールといったものが進められているその背景には、やはり学校が、学校だけでなく、地域のニーズにどれだけ反応できるか、補完するという側面もあると思うし、地域そのものが活性化していくために学校がどう役立てられるのか、という側面もあるのではないだろうか。関係者が一つに集まって、コミュニティ・スクールという枠の中で考えていこう、という世の中の流れがあるのだと思う。そういう仕組みをどう作っていくか、考えていくことは必要なことだと考える。

【事務局】

これまでの会議の中でも、テーマがつながりづくりになった時に、学校・家庭・地域で連携していくことの必要性と、連携していくときにどこが音頭を取っていくのか、制度の整備が必要という意見があった。学校・家庭・地域の連携も、世代をこえたつながりづくりを考えていく上で重要なポイントになると考える。委員のお話の中で、コミュニティ・スクールの話が出たが、コミュニティ・スクールについて補足で説明させていただく。地域が学校を評価するのではなく、地域が学校と一緒にあって、学校運営に関して協議する仕組みとして導入されたのが、コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）という考え方。学校運営協議会を導入した学校を、コミュニティ・スクールと呼ぶ。「熟議の場」とよく言われるが、主な機能として、学校長の作成する学校運営の基本方針について、学校長だけで決めるのではなく、学校運営協議会でも共有し、承認する。また学校運営について、学校運営協議会は意見を述べることができる。そして、コミュニティ・スクールと併せて出てくるのが、地域学校協働活動本部。学校運営協議会の場で、その地域でどのような子どもたちを育てていくのか、学校と地域で熟議する。その熟議の場には、地域学校協働活動推進員を委員として置き、地域学校協働活動推進員は、熟議の結果を地域活動の拠点である地域学校協働活動本部に持ち帰り、共有し、実践していく。熟議の場である学校運営協議会と、実践の場である地域学校協働活動本部、この両輪で地域の子どもたちを育てていこう、という考え方である。学校評議員制度などによる「開かれた学校」に留まらず、地域と学校とが協働で、一緒になって子どもたちを育てていくという「地域とともにある学校」を目指した制度がコミュニティ・スクールである。富士見市ではまだ導入されていない。

【委員】

ふじみ野小学校の学校評議員を務めたことがある。ただ校長先生とお話しするだけで、あまり発展性がないと感じていた。なので、コミュニティ・スクールのような考え方が出てきたと知り、教育現場も進化しているのだと感じた。富士見市ではまだ導入されていないとのことだが、それはどういった理由からなのか。

【委員】

ほぼ同じような性格を担った、学校運営支援者協議会というものが富士見市では既に導入されている。

- 【議 長】** コミュニティ・スクールの構想が出た時に、結果的に学校の負担になるだけなのではないかという懸念と、地域によって事情が異なる、という現状があり、学校自体も、何十年という歴史を積み上げてきている組織であるから、そう簡単には地域との協働というものは成り立っていかないのではないかと、という議論があった。当時は新設校から導入していこうという自治体も多かった。しかしそれ以上進まず、なかなか普及しなかった。ここ10年くらいでコミュニティ・スクール構想が再度見直され、動き出した。しかし、これは地域の成長が必要とされる制度であるとする。学校側にも課題があり、学校長を中心として、多くの教職員の方々に運営しているのが学校であるが、一人ひとりの教職員を見た時に、決して地域と結びついている人材ばかりではない。そうすると地域理解が進みにくい。
- 【事務局】** つながりの必要性についても委員から意見を伺いたい。
- 【議 長】** 委員から、地域の活動に参加した時の感想として「楽しい」という言葉と、「達成感」という言葉が出た。これがキーワードになるのではないだろうか。
- 【事務局】** ご指摘の通り、大人がしっかりと地域の中でつながっていくことは、子どもにとっても良い効果を生むものだと考える。大人が楽しむからこそ、子どもも楽しんで参加できるのではないだろうか。地域内で大人がしっかりとつながりを形成することで活性化し、それを見た子どもたちは郷土愛を育むことができる。また地域活動が活発であれば、子どもたちのための事業等も行われる。そうなれば、子ども達に様々な大人とふれあう機会や、さまざまな経験する機会を提供することができ、生きる力を育んでいくことができるのではないだろうか。
- 【委 員】** 入間地区社会教育協議会の会議の中でも、コミュニティ・スクールという言葉がキーワードとして出ている。10年程前、その地域の歴史をよく知っている団体が、夏休み期間を利用して小学校の先生たちに地域の歴史を教えようと働きかけたことがあった。しかしそれは、夏休み中は教員は多忙だという事で断られてしまった。学校と地域との話し合い、連携がもう少し上手くできていれば、実現できていたのではないかと思うと、残念に感じる。
- 【委 員】** 入間地区社会教育協議会に参加していた時に、会議の中でコミュニティ・スクールがテーマになったことがある。その時は、コミュニティ・スクールが進められている理由として、子どもたちが減ってきている中で、学校だけで教育するのは不安だから、という印象を受けた。学校だけで子どもたちを育てるのではなく、地域も支えてほしい、というニュアンスを感じた。いずれは統合されるかもしれないし、一つの学校だけで子どもたちの教育を担うのではなく、地域全体で担った方がよいのではないかと、という考え方だったのではないかと思う。自治体により事情が異なると思うが、もし今後富士見市でも導入されるのであれば、学校の中に地域の誰か一人がお手伝いとして入っていくという一方的な関係ではなくて、地域も学校も、どちらも対等な関係でやっていければいいのではないかと思う。そのためには、学校ももちろん組織としてしっかり

としていなくてはいけないが、地域も成熟していなくてはいけない。地域がしっかりと成熟していないと、対等な関係は築けないのではないか。私たちは、地域をしっかりと成長させることが必要なのではないかと考える。学校の側から地域に注目してもらえることは大事なことだが、地域がそれなりに成熟していないと、対等な関係は築けない。地域の中の一人が学校に協力するのではなく、地域という一つの組織として、関わっていきけるようになってほしいと考える。

【議長】 地域が成熟するとはどういうことか伺いたい。

【委員】 学校も地域の中にあるし、地域も学校を含んでいる。両者ともに理解し合わなければならないと思う。大人だけが関わっている活動ではなく、子どもも参加したいと言ったら受け入れられる組織でなければならないのではないだろうか。地域と学校と、全く同列の関係を築けるような地域。学校が頼りにしてくれるという事は、地域が学校のことをよく分かっているという事だと思う。地域としても自信があるから学校と一緒にやっていきたいと考えるのではないだろうか。富士見市はまだその域までは到達していないのではないかなと感じている。

【議長】 各委員から色々な意見が出た。なぜ、つながりが必要なのか、その点について今後検討していければよいのではないかと思う。つながりを築くことのメリットについて、各委員の経験をもとに、具体例をお示しいただければ。

3 その他

次回会議日程

令和4年度第4回会議

日程：令和4年10月3日（月）午後7時～

場所：中央図書館 視聴覚ホール